

化政期における大鶴庵塊翁の月並句合について

— 江戸後期尾張俳壇の月並句合 (三) —

寺島 徹

はじめに

化政期の尾張俳人、大鶴庵塊翁（一七六四～一八二九）は、暮雨巷一世加藤暁台（一七三二～一七九二）や暮雨巷二世桜田臥央（一八一〇没）のあとを継ぐ形で、月並句合を盛んに行っている。^{〔注1〕}尾張俳壇における暮雨巷を中心とする月並句合の展開を明確にする作業の一環として、本稿では手元に集まった大鶴庵塊翁の月並句合資料、点帖資料をもとに、化政期の尾張俳壇の月並句合について考えてみたい。また、月並句合を通じた尾張俳壇と他地域との交流事例についても敷衍する。

一 塊翁の月並句合

大鶴庵塊翁は、明和元年（一七六四）生。文政十二年（一八二九）十月十七日に六十六歳で没している。尾張知多の草木村の生まれで、本名、竹内春政。通称、清兵衛。当初、竹有と号し、のち大鶴庵、塊翁と号した。暁台、士朗門。暁台追善の『落梅花』が初見。名古屋桑名町住。文化期から多くの俳書を編み、枇杷園門弟として頭角をあらわす。化政期には月並句合の経営をもとに、尾張俳壇に重きをなす。

編著に、『あをむしろ』（文化元年）、『草名集』（文政五―一〇年）、『花鳥楽事』、『雪月文事』などがある。^{〔注2〕}

服部徳次郎氏は、『中京俳人考説』（文化財叢書71号）の解説（五、士朗中心の文化・文政期）において、「文政期は士朗門独占から解体され、各派すべてを融合一体化したバラエティのある俳諧」が発展していたと位置づけている。その宗匠乱立の尾張俳壇にあって、塊翁が、尾張俳壇の中心的存在となり、文政期に盛んに月並句合を行ったことは、ある程度知られている。また、近年、加藤定彦氏『俳諧常磐草』の紹介―暮雨巷月次句合の余波―（東海近世24号、平成28年7月）において、塊翁が暁台、臥央の暮雨巷月並句合を覆刻し出版していることが紹介されている。士朗存命の頃より、塊翁の月並句合事業への関心の深さがうかがえる。暁台、臥央と続いた暮雨巷月並句合であるが、士朗は、暁台の主要地盤をほぼ引き継ぎながら、あまり発句合に積極的ではなかったようである。^{〔注3〕}暮雨巷系の月並句合を復活する形で大々的に引き継いだのは、結果的に塊翁であったということもできよう。

塊翁の月並句合資料を整理して掲げてみたい。^{〔注4〕}残存する丁刷を示してみよう。^{〔注5〕}

○丁刷刊行の推移

- ①文化十四年(一八一七) 十月五題(早大玉晁叢書「俳叢」の内)
外題ナシ ※早稲田大学図書館蔵
- ②文政二年(一八一九) 正月五題〜十二月五題
外題「大雀庵卯選集」 ※新城ふるさと情報館牧野文庫蔵
- ③文政三年(一八二〇) 一月、十月五題〜十二月五題
外題「大鶴庵月次」(架蔵本) ※常滑市某氏蔵・早稲田大学図書館蔵・架蔵
- ④文政四年(一八二二) 正月初懐紙〜十二月五題
外題「初懐紙」(天理本) ※天理図書館綿屋文庫蔵・架蔵
- ⑤文政五年(一八二二) 正月五題〜十二月五題
外題ナシ ※常滑市某氏蔵
- ⑥文政六年(一八二三) 正月五題〜十二月五題
外題ナシ ※藤園堂蔵・架蔵
- ⑦文政七年(一八二四) 正月五題〜十二月五題
外題ナシ ※藤園堂蔵
- ⑧文政七年(一八二四) 正月五題〜十二月五題
外題ナシ ※天理図書館綿屋文庫蔵
- ⑨文政八年(一八二五) 正月五題〜十二月五題
外題「つきなみ集」 ※藤園堂蔵
- 外題「つきなみ集」 ※天理図書館綿屋文庫蔵

これらを遡る文化十二年から文化十三年に、臥央の月並五題がはじまっていたことがしられる。『尾三古俳書解題』の四七九番「塊翁月次五題」の項(一七六頁)に、文化十二年〜文化十三年の丁刷が引用される。『文化乙亥・丙子月次五題』は、故服部徳次郎氏蔵の所蔵と記されるが、現存を確認できない。

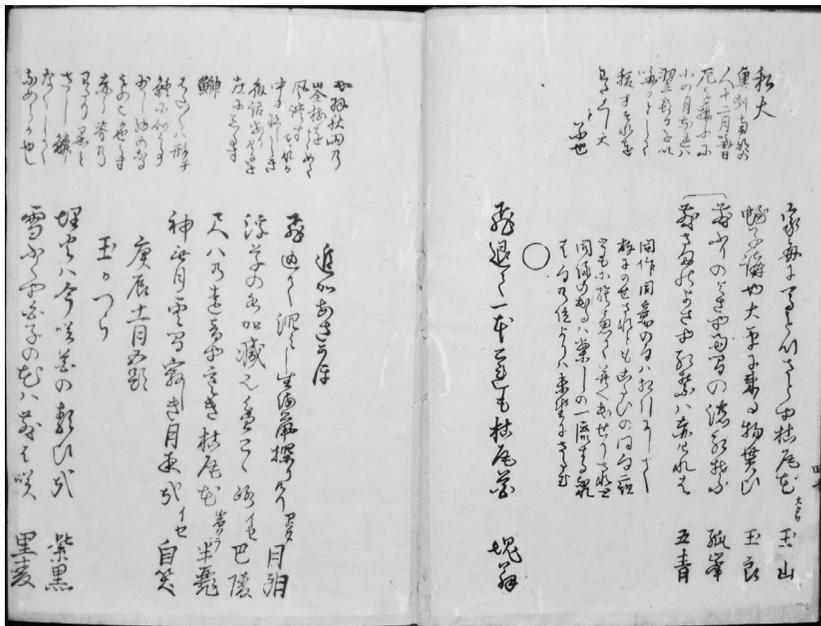


図1 塊翁評『月次句合五題』(仮題) <③文政三年> 架蔵

文化十四年の十月月並五題が、早大図書館蔵の玉晁叢書「俳叢」の中に錯簡の形で残存する。確認できるところでは、文政三年のものからは、上部に塊翁評として、俳論、式目、季語などの解説が載る。文政七年以降は、「大鶴庵塊翁撰」(⑧⑨)のものに加えて「大鶴庵宗匠評 琴左・加笛輯」(⑦)が見られ、注意を要する。『尾三古俳書解題』

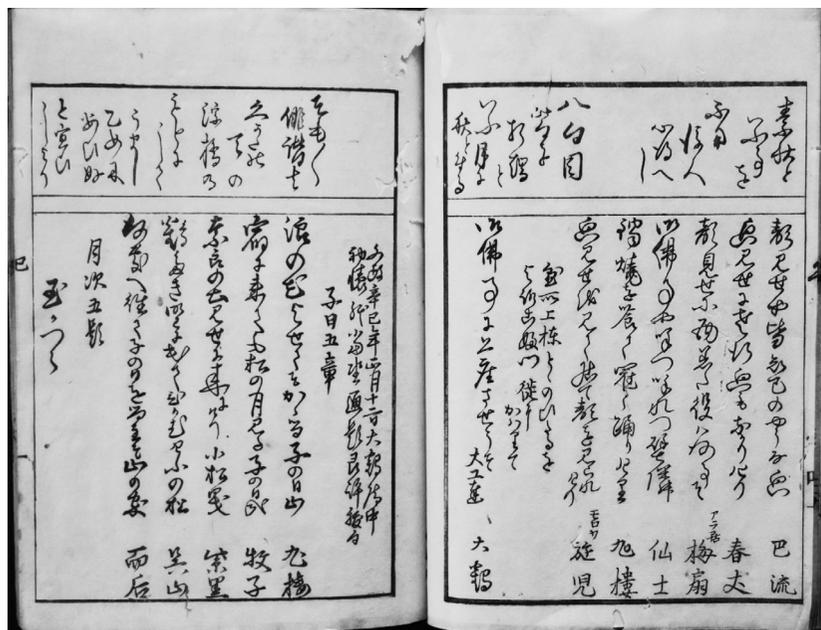


図2 塊翁評『月次句合五題』(仮題) <⑤文政五・④文政四年> 架蔵

(二九〇頁)に、「琴笛集」の立項があり、(文政十年 琴左・加笛編 塊翁評)とされ、騏上序「清須以北の月次五題の撰集である」(服部 徳次郎氏稿)と分析される。首肯されるべきであろう(ただし、『尾 三古俳書解題』の指す文政十年は、正しくは文政七年であろう)。
 また、近頃、発表された大野哲夫氏「春日井の俳諧(四)」(郷土文

化230号、平成30年8月)には、塊翁の文政四年(一八二二)五月の返 草(あるいは丁刷か)と思しき資料が紹介される。勝川連のもので、 巻本は松濤とある。題は、郭公、螢、若葉等であり、④にあげた丁刷 とは題がことなっており(④は、苔の花、水鶏、早苗取、帷子、若竹 の五題)、大野稿掲載写真1に乱題の文字がみえることから、別だ ての発句合と考えられる。あとで紹介する架蔵の点帖にも、その傾向 はみえ、塊翁の発句合は、「月並五題」の他にも同時に別種のもので 行われていた様子がうかがえる。

【点印】

塊翁の五題月並句合の点印は、最高点が「玉かづら」、つづいて「楳 柱」「朝顔」「瞿麦」の順である。いずれも『源氏物語』にゆかりのあ る言葉を押印している。「玉かづら」が二句程度、「楳柱」が十、十五 句程度、「朝顔」が三十句から四十句程度である。「朝顔」までが丁刷 に載る、いわば入集句である。月ごとの巻軸には、基本的に塊翁の発 句をおく。後述するが、「瞿麦」は、点帖で点を付けるときのもので、 点印の中では最も下位である。「朝顔」を付けた中から、点帖の巻末 で「玉かづら」「楳柱」が選ばれることとなる。架蔵点帖(文政二年) によれば、「玉かづら」が十五点、「楳柱」が十点、「朝顔」が七点で ある。

【入集者】

尾張地区の参加者が多い。たとえば、初期にまとまった丁刷が残存 する文政二年でみると、この当時の塊翁一派の代表的な撰集『あ とのともし』(二代専庵編)と文政二年の丁刷(参加者二二三名)の 重複者は、塊翁高弟の花鏡らを中心とする三十七名。土朗七回忌の『あ とのともし』は、全国的な俳人の入集も多いこともあり、重複がやや 少ない気もする。しかし、花鏡、呉山、紫黒、司青、七馬、杜牧、盛 榎(吾鬢)、桃児(多加木)、蓼長(朝官)、待亮(三河)等、塊翁門

の中心をなす俳人は、ここにほぼ含まれている。月並五題が、門弟を中心とする俳壇経営の色彩を帯びていたことを示している。土朗の地盤を月並句合のシステムを利用して上手く引き継いでいる様子もうかがえる。

文政二年の丁刷で地域別の参加者についてみておこう。高弟の花鏡(味鏡)ら所付のない尾張・名古屋の参加者が圧倒的に多いが、尾張地区では他に、尾張北部の犬山七名、多加木一〇名、妙興寺四名、浅野四名が目立ち、尾張知多も大高、大野などの参加者がある。他の地域では、三河一八名、伊勢二三名、美濃九名、信濃六名、遠江二名、駿河二名である。

つぎに、文政二年(二二三名)と興隆期である文政四年(二五八名)の丁刷をもとに、参加者の推移を確認してみよう。重複者は六十六名。花鏡、紫黒、司青ら高弟を中心に重なっている。

文政四年では、尾張地区では、鳴海は九名(文政二年は三名)、大野が一五名(同二名)と参加者をのぼしている。星崎は八名(同三名)、犬山十二名(同七名)、ヒラ五名(同一名)、諸和四名(同、参加者なし)、多加木七名あたりが目立つ。清洲は七名(文政二年は騏上のみ)参加。

他地域では、三河二一名、伊勢二一名、美濃は、今尾の五名を入れれば一一名、遠江二名の参加である。文政二年に比べると、信濃の参加がみられない。尾張では大野、清洲の参加が大幅に増えている。琴左、加笛などの清洲連中は、この頃から参加が目立ち、文政後期には中心の一つとして機能していくことは注目されよう。

尾張俳壇に加え、信州などの遠隔の地域が入選する丁刷(①②③⑧⑨)と、尾張地区中心の丁刷(④⑤⑥⑦)がみえる(ただし、両者の入集者はかなり重なる)。前者については、第三節で信州阿島連中のケースを例に詳述したい。

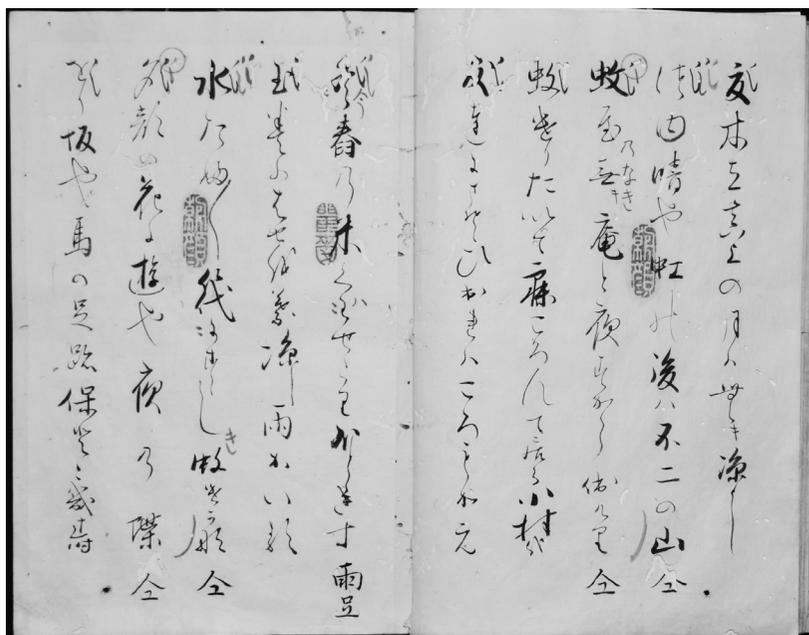


図3 塊翁評『文政二年発句合点帖』(仮題) 架蔵

二 塊翁の点帖資料の紹介

つぎに、残存する発句合の点帖を掲げてみよう。次の三種である。

A 文政二年（一八一九）点帖 夏季乱題

外題「夏季乱題」

※架蔵

B 文政四年（一八二一）点帖 初鯉等五題

外題「月次五題」

※豊橋市中央図書館蔵

C 文政期 点帖

秋の夜・鹿の声の二題

外題「しの、め」

※岐阜県立図書館蔵

別立ての発句合の点帖と思われるA、Cとルーティーンの催しである五題月次句合の点帖Bが見られる。まず年代の早いAの書誌を掲げよう。

A 大鶴庵塊翁評「文政二年発句合点帖」（仮題）

書誌

装幀 半紙本写一冊。袋綴。

表紙 濃縹色。菱紋艶出し。

寸法 縦二四・二×横一六・六糎。

題簽 「夏季乱題 于時文政第貳夏 大鶴庵塊翁評 自筆本」

（中央）後補

丁数 墨付き四十七丁。遊紙三丁。

行数 半丁につき五句。

題 「涼」「行々子」「蛩」「牡丹」「子規」「夕顔」「夏の月」「蛩」

「五月雨」等

投句人数 三十人（推定）。

寄句数 四百三十句。

奥 大鶴庵塊翁

識語 于時文政第二夏閏中呂（閏四月）直気筏登仕鳳（印）

書写者 句一執筆 判詞・添削・入選句の転記 塊翁

点印 「玉鬘」「楨柱」「朝顔」「瞿麦」○（朱印）

年代 文政二年夏（閏四月）

所蔵 架蔵

点帖Aは、五題月並句合とは、別立ての発句合と考えられる。文政二年の丁刷（一覽②）との重なりは多くない。点帖で名が明記される28名のうち、大野の紫鳳・紫扇・百歌のみ。しかし、前山、大草の連中という点では丁刷の傾向と隔たつてはいない。「瞿麦」「朝顔」朱印が捺され、さらに、「朝顔」の中から秀逸句五句を巻末に取りだしている。巻末の句をそのままあげてみよう。

（朝顔） 五 湖の浪面白し青あらし

（朝顔） 四 涼しさの余りて月の夜明哉

（朝顔） 三 牡丹咲て心大きう成にけり

（楨柱） 第式 朝の間ハさみだれあきもせざりけり

（楨柱） 巻頭 旅人ハ旅瘦するを夏の月

小倉 琴 四

四々丸

紫扇

前山 露 溪

卷元 紫 鳳

点帖Bは、ルーティーンの月並五題の点帖である。文政四年四月の丁刷と一致する。臥央の月並句合の内容をする上で欠かすことのできない資料といえる。原本未見だが、豊橋市中央図書館羽田文庫所蔵の影印資料を参照した。

書誌をわかる範囲で示すと、「文政己四月／月次五題／名古屋人大雀菴塊翁評」（打ち付け書）。塊翁評点帖（文政四年四月）。写本一冊。丁数、墨付一六四丁。行数、半丁につき、五句。題「初鯉」「新茶」「牡丹」「行々子」「筍」。寄席数「一六六十余吟」（奥）。点印「玉鬘」「朝顔」「瞿麦」○（朱）。参加者一六七名。表紙に「羽田野発句入」と書入あり。識語「羽田野たか雄」。豊橋市中央図書館所蔵。請求番号（九

一・三／一一〇)

なお、識語に、

こハおのがいとく若かりし時俳諧のほ句といふことをもものしてんと名古屋なる大雀庵の月並の巻へ句を出したるに「のりくらも持し牡丹の主哉」といふがいとよろしとて巻軸といふにえらまれて、この巻をほう美としておこせたるなり。(下略)。

とある。識語からわかるように、もつとも高点をとった文英に清書巻として送られたものであることがわかる。文英は、所付に「三羽田西方」とあり、三州の羽田の俳人。のちに国学者として知られる羽田野敬雄のことである。

文政四年の丁刷全体の参加者が、二五八名。この点帖の参加者が一六七名である。塊翁の月並句合の規模がおおよそ、一五〇名から二五〇名の規模であったことがうかがえる。晝台と臥央の月次句合同様、無名の参加者を広く募るといふより、塊翁の俳壇経営に即した規模だったと考えられる。

点帖Cについては、国文学研究資料館のマイクロフィルムを参照したもので原本は未見。わかる範囲の書誌事項を示そう。

装幀、半紙本写一冊。袋綴。表紙、菱紋ちらし。題簽「しの、め」(中央)。丁数、墨付き六十一丁。行数、半丁につき四句。白鷗序。塊翁跋 識語、執事。凡例あり。題「秋の夜」「鹿」。寄句数「四百式拾八章」。書写者 句一執筆 判詞・添削・入選句の転記一塊翁。点印「玉鬢」「楨柱」「朝顔」「瞿麦」○(朱印)。年代、文政九年以前。岐阜県立図書館所蔵。

これは、序、凡例などがあり、また、参加者は七馬・騏上、花鏡、守栖など一部馴染みのメンバーもいるものの、無点の句にもすべて人名がふられており、通常の月並とはかなり異なっている。他流派との

交流の色彩が濃く、通常の発句合の点帖とは趣を異にする特別な企画という印象を受ける。

白鷗の序には、「ある夜、玉屑・茶交といへるふたりのゑせをのこ来りて」とはじまり、栗の本玉屑らの勧めで、序文を書くことになったのだとする。断つたものの、「ふたりのをのこ顔ふくらかにして秋の夜の淋しさも鹿の音の哀れさもしらぬ人こそせむすべなければとつぶやきて」と、強く促され、序をしたためることになったとある。つづく凡例には、執筆の立場から次のように規準が示される。

一、巻中に載る句は早いもの順とする。

一、「秋の夜」「鹿」の両題を聞き違えた者もあり、題を間違えたものの中によい句もある。執事が句主に問い合わせて直してもらうのも煩わしいため、そのままにして載せた。かりに鹿を鶉と聞き違えた場合でも、鶉として撰・判をする。

一、坐五に「秋の夜」と置いたものがあるが、「夜の秋」「秋の宵」の書き間違いであっても、添削は大人(塊翁)の判断に任せ、(執筆が)書き直しはしない。

一、抜句(高点)数章には、かげ物(景品)を送る。「すげなき物」といへども道をきそふのしるしならむ」と景品を送る理由も述べる。

跋には、判者、塊翁の言葉が記される。引用してみよう。

玉の井のさとの玉屑・茶交の二子よりひとつの包ミを贈りこさる。あけて見るに玉手箱くるしきにハあらで、秋の夜のあハれをつくしたるくさくさに尻声かなしき鹿のさびしみをかいそへたるにぞありける。これが中より十キの玉を選び出て甲乙をさだめよと也。

として、「楨柱」四句と「朝顔」六句の都合十句を高点句として掲げる。

「瞿麦」印を捺したのから、さらに、十句を選んだものである。冒頭の一句あげておこう。

(楨柱・印) 秋の夜の忘れもせず明にけり 五水

つづく評者塊翁の言葉として、

疵なき玉とハ并べたれど、くだの穴して見るにひとしきひがめに
なもあなれば、かへりゆきて后ひらき見ての後、浦嶋がこゝろや
起し給ハむぞうき。

との文言で締めくくられる。最後に、執事の識語として、

拾点四章

巻頭短冊掛 巻

同三章 いづれもへ

小野の炭壺俵 水僊一もと

短冊可遣壺枚づ、

とあり、景品についての覚え書きが記される。亀堂、士精の二子は遠いため、重い景品をおくることができず、「月樵画扇」などを引き替えて贈る旨が書き留められ、七点六章については、蘭亭の盃と短冊一枚ずつ贈る旨が記される。

この点帖の催しは、序や塊翁の跋文にあるように、栗の本玉屑らが、塊翁に撰を依頼して実現したものである。単発の発句合と思われるが、点と景品の関係など、塊翁撰の発句合の一つのあり方を示している興味深い。

つぎに、点帖A、B、Cを通じ、添削について概観してみたい。「仮名遣い」「切字」などの面から評の傾向についてみていこう。(点印は、

(一) に入れ略称で示した。句の清濁は原典のまま、ミセケチは一で示した。)

(瞿) 何所やら小涼しきう也滝の音 華月 (夏季乱題)

恋に朽なん名こそおしけれ夕涼ミ 琴二 (夏季乱題)

(瞿) 汐干渴盃ひとつひろいけり 雨豆 (夏季乱題)

(瞿) 冬春の米くわせたりほと、きす 薪背に人はをくれて閑古鳥 咲初て入日をおしむ牡丹かな 夕闇をくつすよう也けしの花 涼しさをしよふて鳴かほと、きす あよふくも雨の中飛はたるかな 麦秋やねむたし嘶して通る 初かつほ潮見の茶屋で喰初し 乗出した船をおしむか行々子

(瞿) 初かつほ潮見の茶屋で喰初し 乗出した船をおしむか行々子

夕闇をくつすよう也けしの花 涼しさをしよふて鳴かほと、きす

あよふくも雨の中飛はたるかな 麦秋やねむたし嘶して通る

○ 初かつほ潮見の茶屋で喰初し 乗出した船をおしむか行々子

(瞿) 初かつほ潮見の茶屋で喰初し 乗出した船をおしむか行々子

(朝) 乗出した船をおしむか行々子

(朝) 乗出した船をおしむか行々子

(朝) 乗出した船をおしむか行々子

仮名遣いについては、いわゆる契沖仮名遣い(歴史的仮名遣い)でない場合、それを正そうとする姿勢がみられる。晝台、臥央の点帖でも同様の傾向がみられた。高点であれば、返草が投句者の手元に返るはずであり、指導の面もある。とくに、他門に対する点帖Cに比べてA、Bではその傾向が強い。

(瞿) 雨の夜小我家に近しほと、ぎす 左高 (夏季乱題)

(朝) 水たふく、筏にす、し、蚊遣かな 雨豆 (夏季乱題)

(朝) 旅人の旅瘦するや夏の月 紫鳳 (夏季乱題)

(瞿) 有明の月小蓮の花のうへ 四々九 (夏季乱題)

(瞿) 生て見る手元にあまると牡丹哉 花岡 (月次五題)

- (瞿) 日暮しの庵ぞ出来けり牡丹茶屋
- (朝) 隠に牡丹の咲ぬ墓の闇
- 秋の夜や浪音高し瀬田のはし
- 秋の夜の長さや老をしられけり
- (瞿) 秋の夜や添ひ来るもの小松の風
- (瞿) 明の鹿おもひ餘りて啼やまぬ

- 白梅 (月次五題)
- 金毛 (月次五題)
- 旭有 (しの、め)
- 大路 (しの、め)
- もりを (しの、め)
- 鉤月 (しの、め)

このように、切字に関しての添削も多くみられる。切字が重なる「水たふく」句の場合のように、切字の使い方に関する具体的な批正もみられる。

- 卯の花をさす也雨部の月の影
- (積) 来ぬ物か来た風情也初松魚
- (瞿) 大木戸を雨に明たりはつ鯉
- (瞿) 初松魚澤に世に罪ハなかりけり
- (瞿) 網引の空寐もならぬけ行々子
- (朝) ひとり子を売やうな直や初鯉
- (瞿) 秋の夜のこゝろハ山にもたれけり
- (瞿) 親子して駕籠つる人よ鹿の声
- (瞿) 秋の夜は夢に付たる鳴子かな
- (瞿) 鹿き、に来てもたれたる巖かな

- 大山 帶句 (夏季乱題)
- 虎有 (月次五題)
- 芝房 (月次五題)
- 連枝 (月次五題)
- 春道 (月次五題)
- 秋甫 (月次五題)
- 卓老 (しの、め)
- 白鷗 (しの、め)
- 旭有 (しの、め)
- 花鏡 (しの、め)

このように、表現や内容に関わる批正も、いくつか見られる。添削の姿勢からは、連枝の句に見られるようにとくに平易で庶民的な句を望む傾向も見られる。

いずれの点帖も、主に句の添削のみで、判詞はほとんどみられない。この点は晝台、臥央の点帖と異なるところである。月並の規模の差も

考慮すべきであろうが、点帖の弟子(参加者)への回覧などは、あまりなかったものであるうか。

三 塊翁と下伊那・阿島俳壇

塊翁月並句合の特徴を探る上で、一つの事例をあげてみたい。第一節で述べたように、塊翁の月並句合は、尾張俳壇を中心に行われていた。ただ、その裾野は広域に及んでいた。ここでは、その顕著な例として、塊翁と下伊那・阿島俳壇との交流を月並句合を通してみていくことにしたい。

塊翁の月並句合の丁刷資料には、阿島俳人たちが沢山みられる。

その原因を探るため、阿島本陣跡のある喬木村郷土資料館を調査したところ、化政期以後の俳諧資料が一次、二次資料を含め、数多く残存していることがわかった。中でも村誌資料目録第21輯「一綴」という島郭 後藤家文書目録』年代不明29番「大鶴庵ノ俳諧／一綴」という記載に注目したい。この一綴自体は資料館に寄託されておらず所在不明だが、目録の記述を手がかりに、大鶴庵塊翁の俳書を調査すると、菊兒ら阿島俳壇の連中が塊翁編『あとのともし』(文政元年)『雁の空』(文政元年)『初音集』(文政二年)等、多くの俳書に入集することがわかる。とくに『あとのともし』は塊翁が一門をあげて士朗追善を行い、江湖に士朗の後継であることを示した俳書である。

春風の手もさ、ぬ也駒が嶽

菊兒(あとのともし)

塊翁の一門の中で一定の地位を確保していたことがうかがえる。

さらに、塊翁編の『文武具茶釜』(文政三年序)に、蘭馨、濫竿・蘆角・菊兒の阿島連中が揃って入集することに着目する。『文武具茶釜』は尾張の塊翁門を中心とした俳書だが、俳人の所付でなく、苗字が付されている点特徴的である。

我閑居して猶蠅を叩きけり

知久 蘭馨

菅笠の春こそ来たればつ霞

佐久間濫竿

ひ、啼の鶉や麦のそこら中

後藤 蘆角

よい水が山からも来てとこらむ

後藤 菊児

ここから蘭馨が阿島代官の知久氏の家系であることが明らかとなる。

『寛政重修諸家譜』や写本『系譜』（喬木村郷土資料館蔵、知久頼福識）

の閏歴、生没年から、七代頼中（文化十年没）、八代頼膺（寛政十二年没）はすでに他界しており、九代頼福（文政十一年没、享年十六歳、

『半歌仙合』時は二二歳頃）を想定することができようか。そうだと

すれば発句から隠居間もない頃であろう。濫竿、蘆角、菊児も知久家

に使える士分階級で、とくに蘆角、菊児は、武家の後藤家資料『阿島

郭後藤家文書』（喬木村郷土資料館所蔵）の中に、蘆角宛南陽舎（蘭馨）

書簡の俳諧書留、雑俳一枚刷り等がみえ、俳諧によく親しんでいた様

がうかがえる。

そのような、塊翁と阿島俳人の交流は文政期の月並句合でも、とく

に顕著にみられるのである。第一節で確認したように、大鶴庵撰『月

並集』（文政二年、文政八年）、大鶴庵評『月並集』（琴左・加笛撰、

文政四年、文政八年）等が残り、とくに塊翁撰の月並句合には、先の

菊児を中心に阿島俳人が恒常的に多数参加（溪南閣、素雀、濫竿・茂

樹・梅扇・蘆角・霰打樓等）する。

あさがほ（点）

大津絵に書もらされつ田にし取 菊児 文政二年二月

朝がほ（点）

能き事の夢が続くよ松の内 菊児 文政八年二月

先の目録の「大鶴庵ノ俳諧／一綴」も月並句合の丁刷とみて相違ない。

時代の特性か入集句も化政期の平明な句ぶりが多い。

ところで、文政六年『月並集』の塊翁評に、

：蕉門になびきて万代不朽の道とはなりぬ。（中略）其種の中に

もとりわけて植接蒔続べきたねは丈草去来のはらわたを探り得た

る暁台・士朗の骨肉を撫るの外なし。そは何を以いふぞとならば

蕉門の糸すぢにみだれてしばらく雑俳におされつなぎとむべき糸

口を失ひたるをやうやく見とめてもとの一筋に続合せたる暮雨叟

暁台也。（下略）。

と述べていることは注意されよう。塊翁の評からは暁台、士朗への思

慕がはっきりみえる。塊翁は、暮雨巷名跡の系譜にこそ連なってい

いものの、暁台、士朗という尾張蕉門の本流を継ぐのは自分だとい

自負もあった。暁台、臥央と続く尾張における暮雨巷月次句合を實

的に継いでいくのは竹有（塊翁）であり、その意識は、近年紹介され

た竹有による暮雨巷月次句合『俳諧常盤草』の再版の試みにもみえ

る。他に尾張俳壇の逸話を載せることで知られる『侘草紙』（楚山編、

文化十一年）は、冒頭に塊翁の俳文を載せ、そこにも暁台を崇敬する

志向性が強くみられる。

先般、この阿島連中が暮雨巷の加藤暁台と『半歌仙合』という試み

を行ったことを論じた。塊翁が暁台門に入ったのは最晩年（追善集『落

梅花』に初入集）のことであるが、その頃に行われた暁台判『半歌仙

合』の試みを、後になって阿島の蘭馨、菊児から聞き及んでいたこと

は容易に推測される。士朗時代には途絶えていた阿島連中と交流を再

開し、門下に取り入れることは、暁台を敬慕する塊翁にとつては自然

のなりゆきだったのではないだろうか。このような塊翁のもと、阿島

連中は確固たる門弟となつて活動するようになっていったのだ。月並

句合を中心に塊翁と阿島連中が繁く交流していたことが判明したわけ

だが、こうした阿島俳壇と尾張俳壇の交流は、視点をかえて下伊那の

俳壇史として見た場合、どのように位置づけられるだろうか。

下伊那と尾張俳壇の俳諧交流史を振り返ってみよう。飯田を中心と

する下伊那という地域の俳諧をみる場合、宝暦六年の雲裡坊の伊那谷訪問は大きな出来事であった。それに触発された也有が桐羽と書簡を通じ深く交流するようになるのである。それ以後の交流の概要を先行研究と筆者の調査を踏まえ年表風にまとめてみる。

A 也有と桐羽を中心とした交流

宝暦六年 雲裡坊杉夫の伊那谷訪問(『若葉』)

同年(十三年) 也有と桐羽の書簡を通じた交流

明和四年 桐羽『歳旦』に也有ら尾張俳人が参加

同 六年 『若葉壳』(蓑月・文樵編)に桐羽参加

安永三年 芭蕉建碑記念『桜塚集』成る

也有・一筆坊鷗沙と下伊那俳人の交流

天明五年 也有『俳諧夢之蹤』に免柳入集。その後も鷗沙『秋

錦現世艸』(寛政二)等に下伊那俳人参加

也有と桐羽を中心とした交流は、明和から安永、天明にかけて也有ゆかりの尾張地場宗匠である一筆坊鷗沙まで広がる。また、『桜塚集』をみると、飯田城下だけでなく士分階級を中心に下伊那地域全体に及ぶ。一方で寛政期・化政期以後の尾張と下伊那の交流は、士朗と桜井蕉雨の交流が目立つ。

B 士朗と蕉雨を中心とした交流

寛政五年 飯田俳書『ささぶね』(蘭二編)に士朗ら参加

同 八年 『松の炭』(蕉雨編)において士朗、蕉雨交流

『春岱』(蕉雨編)に士朗ら尾張連中参加

享和元年 士朗、『鶴芝』の旅で飯田を訪ね、蕉雨と交流

文化六年 士朗と飯田の介亭との交流(『宇羅閑良須』)

明和(天明期) **A** にみられた、いわゆる尾張旧派(美濃派系を含む)と言える也有交遊圏の俳人と飯田俳人との交流は途絶え、寛政期以後

B は、蕉風の新風である士朗と飯田の蕉雨との交流が中心となっ

ていく観がある。

このように先行研究をもとに調査をくわえ、下伊那と尾張の俳壇交流を俯瞰したとき、両俳壇の交流には天明期と寛政期に大きな断絶があるように見え、それぞれの交流が散発的に行われていたかみえる。先に引いたように、寛政初めに暁台が下伊那の阿島俳人に対して行った暁台判『半歌仙合』(仮題)という点帖を寓目するに及び、この資料を **A** と **B** の間において分析すると、尾張俳壇と下伊那地域には、武士階層を中心とした交流 **A** と、町人を中心とした交流 **B** という質的な違いがあることがあらためてわかる。一方で、全体として、也有から鷗沙・暁台、暁台から士朗、さらには後代の塊翁(竹有)へと複層的・重層的に交流が展開された様子がかがえるのである。

前述の拙稿で述べたように、暁台の半歌仙合の催しは一時的なものであったらしく、暁台没後、阿島俳人との交流が士朗に波及することはなかったとおぼしい。暁台の新風を受け継いだ士朗は、寛政・享和・文化期を通じて蕉雨・壺伯、そして介亭といった飯田城下の富裕な町人層と交流を深めていく。阿島俳壇と尾張俳壇の交流は鷗沙の没する寛政八年をもって、ひとまず途絶えるのであった。

しかし、そのあと、本稿でみたように、塊翁が也有・鷗沙・暁台とつづいた阿島連中との交流を復活させ、深めていくことがわかった。ただし、どのようなきっかけで、塊翁が阿島連中との交流を復活させるようになったのかは、今後の検討課題といえよう。

さて、三河と下伊那を結ぶ中馬街道は、江戸前期から塩の道として知られるが、足助から飯田街道を通り尾張へと道が続いていた。その道は商いだけでなく文化を結ぶ道としての役割も果たしてきたのである。江戸時代を通じて、その下伊那の関所を一手に取り仕切ったのが本稿で論じた阿島を治める旗本知久氏である。暁台判『半歌仙合』および、塊翁月次句合に参加した知久家とその家臣連中を手がかりとして、

その俳諧交流の糸を辿ることで、あらたに也有、鷗沙、暁台、そして後代の塊翁へと連なる下伊那の武士階層と尾張俳壇の交流が指定できるのである。それに交錯する形で行われた士朗と町人層との交流をあわせ見るとき、江戸後期の中馬街道筋の俳諧交流史はより豊かなものであったことがうかがい知れる。なお今回の阿島の事例をもとにすれば、福与、飯島等、他の下伊那俳壇への波及も予測されることを付言しておきたい。

おわりに

塊翁の月並句合について、丁刷、点帖を中心に素描した。士朗亡きあとの尾張俳壇経営の一環として、塊翁が月並句合のシステムを利用していったことは容易に理解できるが、阿島俳壇のような別地域の俳壇と月並句合を通して交流していたことは尾張と他俳壇の交流史を考える上でも興味深いことと思われる。

三回にわたり尾張後期の月次句合を調査してきたことで、この地域の俳壇経営の特徴の一端を知りえたと考ええる。今回、粗上へのせたような丁刷、点帖は、まだまだ各所に残存しているに相違ない。今後、引き続き調査を進めていきたい。

注

1 尾張の加藤暁台の事例を拙稿「暁台の晩年と月並句合」(連歌俳諧研究94)「(翻刻)中興期俳諧月並句合資料―加藤暁台の点取帖・摺物・投句控」(国文学研究資料館文献資料部調査研究報告19号)等において取り上げた。臥央の月次句合について、「寛政・享和期の臥央の月次句合点帖資料につ

て」(『金城学院大学論集 人文科学編』15:1、平成30年9月)で取り上げた。

2 塊翁(竹有)の事蹟については、鬼頭素朗・伊藤亮三氏『尾張俳人考』(奎星社、昭和15年)等に詳しい。もっとも新しいものでは、吉田弘氏『知多半島文学散歩』(平成17年、私家版)に塊翁の俳諧活動について言及がある。3 服部徳次郎氏『真野家文書』(豊明市編纂室)に士朗が発句合の評を付けている例がみられるが、士朗の月並句合資料はそれほど多く残っていない。

4 国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースで検出される塊翁月並句合の丁刷資料については、マイクロフイツシュによった。

5 丁刷については、基本的に年ごとにまとめられている。しかし、早大蔵の①③は、玉晁叢書「俳叢」のうちに錯簡の形でそれぞれ1ヶ月分が残存する。

①③は、十月から十二月までの3ヶ月分が残存する。なお、常滑市の某氏ご教示の「文政三年 塊翁撰月次五題」「文政四年 塊翁撰月次五題」も存在する(複写本のみ確認)。

④⑤の架蔵本は、文政五年と文政四年の丁刷が一冊にまとめられたもの。順序が、文政五年、四年の順で綴じられている。五年は、十二月が欠ける(図2参照)。原本を手にとることのできた架蔵本の書誌だけ試みに掲げておこう。

③ 「大雀庵月次」

半一冊。外題「大雀庵月次」(中央)。縦二二・六糎×一六・五糎。表紙、標色。全十一丁(三七丁〜四七丁)

④⑤ 「大鶴庵月次」

半一冊。縦二二・八糎×一六・六糎。表紙、標色。全八九丁。罫あり。柱刻「午 一(〜四二)」「巳 一(〜四八)」

6 『阿島郭 後藤家文書』の①『はいかい若紫』(高評)「年代不明一枚刷作者―防転ら六百七拾八句」(喬木村郷土資料館寄託料)②『芦角宛南陽舎(蘭英)書簡(俳句の批評)』(同)等の一次資料の他、村誌資料目録第22輯(蘭写版)『知久分家文書』(北知久・御下屋敷)文書目録に「松露庵鳳佐白連」

(文化八〜九)、「誹風たねふくべ」(天保辰夏)、「歌仙行三吟秋守」(天保甲辰仲秋)等の記載あり。

7 加藤定彦氏『俳諧常盤草』の紹介―暮雨巷月次句合の余波―(『東海近世』24号、平成28年7月)参照。暮雨巷月次句合の再版本には、暁台、臥央に連なろうとする竹有(塊翁)の志向性が垣間見られる。

8 拙稿「加藤暁台と半歌仙合の試み―晩年における下伊那・阿島俳壇への批点をめぐって」(連歌俳諧研究135号、平成30年9月)

9 拙稿「宝暦期における横井也有の蕉風意識について―美濃派および露川門への対応を視座として」(『国語と国文学』91―3、平成26年3月)等に、雲裡坊、也有と桐羽の俳諧交流の意味を論じた。

10 矢羽勝幸氏「芭蕉建碑記念集「桜塚集」」(『伊那』29、伊那史学会昭和56年10月)に翻刻紹介あり。

11 『喬木村村誌 上』(喬木村村誌編纂委員会、昭和54年)等参照。

〔付記〕本稿は科学研究費の研究助成(基盤研究(C) 課題番号17K02471)による成果の一部である。